

# 新 家の履歴書

題字・イラストレーション 市川興一

417

## 田中康夫 (作家)

「もはや戦後ではない」年に生まれ、二十代で「時代の気分」を代弁。あれから「33年後」に描いた東京。



たなかやすお/1956(昭和31)年東京都武蔵野市生まれ。一橋大学在学中の80年に書いた小説『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。2000年長野県知事選に出馬し当選。2期務める。07年参議院議員、09年衆議院議員。11月に上梓した『33年後のなんとなく、クリスタル』が話題に。

松本市(長野県)にいた小学生時代、夏休みの課題学習で糸魚川までの大糸線旅行記を描いたんです。後に最初の小説が世に出たとき、「そういえば」って親が巻紙みたいに長い絵日記を引っ張り出してきたら、文章の下に「穂高の礫山美術館とは……」ってな解説が幾つも付いていた。「註」のルーツはここにあっ

たんだなって(笑)。

一九八一年に出版されたデビュー小説『なんとなく、クリスタル』(以下『もくとクリ』)がベストセラーとなり、一躍「時代の気分」の代弁者となった田中康夫さん。その書には四百四十もの註が付されていた。そして時を越え、先ごろ上

梓した『33年後のなんとなく、クリスタル』(以下『いまくり』)でも、同じ手法が用いられているのだ。

鷗外や漱石の小説に出てくる地名などの固有名詞は、今や文庫本に解説がなければ単なる閉ざされた記号でしかない。同じ発想で僕は註をつけようと思ったのです。

お婆ちゃんの千代は、大阪・船場の道修町の出身で、実家は歌舞伎役者が使う顔料をドイツから輸入する問屋でした。女学校時代には阪急電鉄で神戸の元町へスカートを買いに行った、と昔話を聞かされました。ミルズカレッジ(米国カリフォルニア州)で学んだという「元祖クリスタル族」なの。スタンフォード大学に留学していた男性と帰国後に結婚して、僕の母とその妹を出産するのですが、日本脳炎で夫は急逝。英語塾を開設し、「鬼畜米英」の世の中で二人の娘を育てた。

長野県へ転居したのは、小学二年生のとき。一年前に信州大学の心理学講師となった父親は単身赴任していた。母親は教員を辞め、家族で上田市へと向かう。一九六四年、東京から都電が少しずつ消え、首都高速道路が姿を現わし始めた、五輪イヤーのことだった。

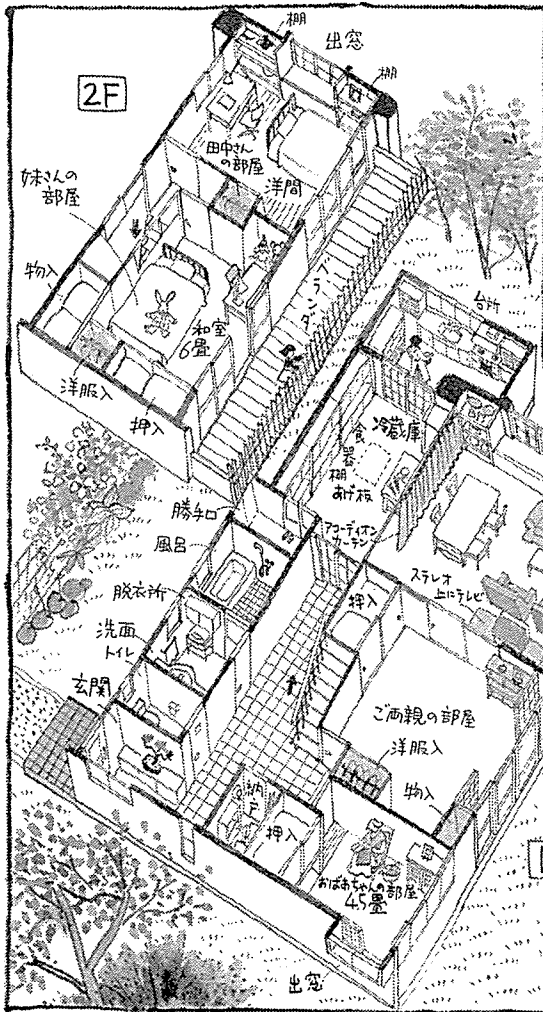
転校先は上田市立東小小学校です。実は三歳半からバイオリンを習っていて、スズキ・メソッドの「才能教育」は松本の浅間温泉で夏季学校を開

いていたから、信州は知っている場所ではあったのです。でも当時は碓氷峠をアプト式の列車が越えていく時代。「先生が方言で授業をしたら僕、判るかなあ」と真顔で両親に尋ねました。田無の谷戸小学校でもらった寄せ書きにも、「熊に食べられないように」と書いてあったりしてね(苦笑)。

繊維学部の桑畑のなかを通過して、桑の実を同級生と食べながら官舎へ帰っていました。海なし県なので、すべての学校にプールがあって、皆、泳ぎがうまい。泳げなかった僕は、顔を水に押しつけられて、必死に習ったものです。

二年後、信大の教養課程が統合されるのを機に一家五人は松本市へ転居。信大附属松本小学校から同中学校、そして松本深志高校卒業までをその地で送る。最初は官舎住まいで、大阪万博の年、中学二年のときに父が市内に家を建てたので、そこに移りました。大学受験のとき、河合塾の「東大オープン」を受けたら、たまたま英語が全国で三番

中学2年生から高校卒業まで住んだ長野県松本市に父親が建てた家



田中さんが生まれたのは、三十三年前からさらに遡ること二十五年、経済白書が「もはや戦後ではない」(本来は巷間伝わる意味とは異なる主旨だった)『いまく

信州と東京にいた時間と、その往復のタイミングが、自分を作り上げていった

大学院に入る前の父が、浜松町にあった神明小学校の教員時代に母と職場で知り合い、結婚するのです。僕が生まれたときは講談社の野間教育研究所にいて、田無の谷戸にあった都営住宅で両親と三つ下の妹、それに明治二十五年生まれで米国帰りの祖母と五人で暮らしていました。学校へ出勤する母よりも父の方が出掛けるのはゆっくりで、妹が生まれる前の僕も父と一緒に朝寝坊すると、祖母に呆れられたものです。

父親が銀行の支店長だった、予備校時代の友だちの家へ行ったら、家族全員で夕食の食卓を囲むのは週に一回あるかないかと聞かされて、カルチャーショックでした。全然ウチと違ったから。「いづれ僕もこうなるのか」と。幼稚園に入る前後の冬かな、母が担任だったクラスの

ラーメン食べて、黄色い各駅停車の終電に乗り込んでね。都電やトローリーバスの時代に東京で生まれ育ち、その東京がコンクリートジャングルへ変貌していく過程を信州という外側から眺め、そして高度経済成長が一段落した東京へと再び予備校で舞い戻った。ずうっと東京で育っても、大学で初めて出てきても、今の僕はなかったかな。信州と東京にいた時間とその往復

のタイミングが、自分を作り上げていった気がします。

一橋大学へ入学後も寮で暮らす日々が続いた。そして、日本興業銀行に内定していたものの卒業直前に停学処分を受けて留年。それがきっかけで、処女作『なんとなく、クリスタル』が生まれた。「方角を間違えて法学ならぬ阿呆学部(苦笑)に在学中」だった頃の

リ』註より)と記した一九五六年。東京・武蔵野市で産声をあげ、小学一年生まで田無市(現西東京市)で過ごした。一家は母方の姓「田中」を名乗ることになる。

保護者が家に来て、コタツに入っていた僕は「おとなしい坊ちゃんですね」と言われたんです。で、「猫被ってるんです」と答えたら、えらく驚かれました。自分でも覚えていません。多分、その前日の夕食で両親が、「あの人は猫を被っている」と知人に関して話していたんでしょ。意味は判らないけど、こういう風に使うんだと思って、言ってみたら。

入園前は、お婆ちゃんに連れられて池袋の西武百貨店に出掛けると、その帰りに「丸物(現バルコ)にあった不二家で、サンドウィッチとフルーツポンチを食べるのが楽しみでした。一度だけ西口に降り立ったら、都バスと違う緑色をしたバスばかりで、「わーっ、メロンバスだ」と。今でもメロンを見ると国際興業バスを連想するのですよ。

様子は、『いまクリ』のなかでも描かれている。

大学入って最初は吉祥寺東町、二年からは小平、そして国立の大学寮を転々としまして。家庭教師やファッションビルのDJや選曲のバイトをしながら遊んでばかりでお勉強は苦手でした。あのまま興銀に入っていたら、外国へ行って英語も上手になって、それで外資系の会社なんぞに移って、最終的には失敗していたかもね(苦笑)。まさに禍福は糾える縄の如しで、留年していなければ小説は書いていなかったわけだ。

「五年生」になった僕は、しおらしく大学の図書館に通って、遅まきながら六法全書を開くんだけど、無味乾燥な形式知の世界にはどうも馴染めない。他方で以前から、学園紛争の後の東京という街に生きる大学生が主人公の小説を誰か書かないかなあ、と思っ



県庁へ通うことにします。

小さな自治体にこそ、素晴らしい首長が多いのです。総務省が主導した平成の大合併で、約三千二百あった全国の自治体は千七百余りに激減した。でも、それで税金が下がったわけでもサービスがよくなったわけでもない。合併特例債で新たなハコモノが出現し、由らしむべし・知らしむべからずとなっただけ。でも、当時の全国知事会で疑念を呈したのは、その直後に「冤罪」に巻き込まれた福島県の佐藤栄佐久さんと、向こう見ずな僕だけでした。

秦阜村を去らざるをえなくなったのは「田中は月に数日しか住所地にいない」と長野市の住民から提訴され、最高裁で敗訴したからです(涙)。で、「長野市に住め」と怒られたつても、両親が住んでいた軽井沢の実家から今度は片道三十分の新幹線通勤となりました。南北二百二十㎞の信州は、県庁所在地が随分と北に偏っています。そこで松本近郊の丘陵に位置する林業総合センターの空き部屋を知事分室として、月に一週間はそこで執務し、諏訪盆地や木曾谷に出掛けていました。

ていたけど一向に出てこなかった。じゃあ自分で書いてみようかなど。

卒業に必要な単位は取得済みだったので、元々の国際関係論のゼミに加えて、関心のあったマーケティングのゼミにも自主的に出席していました。資生堂の工場見学で、「沖繩に出荷するクリームは、温度で膨張するので一ミリグラム少なくする」という説明に僕が反応したら、広報担当者が喜んで「ぜひウチに入社を」なんて言われたりしました。数字や法令がすべてという教授も多い中で、本ゼミの細谷千博先生もサブゼミの田内幸一先生も、のちに法学部長になった憲法の杉原泰雄先生も、留年した僕を随分と気に掛けて下さり、有り難かった。

一九八〇年、締め切り当日の五月末日に応募した処女作が「文藝」賞を受賞したのは十月のこと。会社訪問の時期と重なり、すでに田中さんはモービル石油とフジテレビから内定を受けていた。翌年四月、モービル石油へ入社する。『もとクリ』は一月に出版され、世間の話題をさらう一方、

三度目の知事選で敗退し、二〇〇六年に東京へ戻る。翌年の参院選の全国区で当選。その二年後の総選挙で尼崎市全域が選挙区の兵庫八区の代議士に。衆参の議員生活は五年に及んだ。一九九四年から『噂の真相』で連載していた「東京ベログリ日記」には数多くの女性がイニシャルで登場したが、二〇一〇年には実際十四年のW嬢と結婚。

再び東京に戻ってからは都内のマンションに移り住み、現在四カ所目です。

代議士(兵庫八区)時代の三年間は阪神尼崎駅前のマンション。選挙区と永田町を行ったり来たりですから、伊丹―羽田の飛行機に年間二百五十便近く搭乗していました。『いまクリ』にも登場するトイプードルのロッタと巡り会ったのも、尼崎中央商店街のベットショップです。

大阪の西隣に位置する尼崎は、人情味と正義感に溢れる街。金融資本主義という市場経済が幅を利かす日本の中で、市場の温もりと確かさが、取り分け阪神沿線の商店街には残っています。「元祖

「こんなものは文学じゃない」などと、高みから散々に酷評されました。

楽しい時も哀しい時も一分一秒、時間は同じ速度で過ぎていくのだから、ならば、目を閉じずに開けたまま、何が起きているのか見ていた方がいいよね、というのが僕なんです。とは言え、なかにし礼さんが最近、『もとクリ』を「文学的の革命」、「いまクリ」を「現代の黙示録」と過分な評価を書いて下さって、穴が有ったら入りたいほどの

### 長野県知事、そして国会議員に。 尼崎中央商店街での運命の巡り会い

翌八二年、離婚してからは白金台(港区)に五年、デザイナーの菊池武夫さんが建てた深沢(世田谷区)の家をお借りして六年住んだ後の九三年、等々力(世田谷区)に庭付きの敷地と建物を購入します。ちなみに、ここは現在でも所有しています。

その間、田中さんは作家としてのみならず、政治経済や社会問題、世相への鋭い筆鋒、舌鋒で存在感を現わしていった。阪神・淡路

こそばゆきでした。卒業直後に結婚して麻布台(港区)に住みます。新人研修先は横浜・元町のスタン

ド。神谷町駅から地下鉄、東横線を乗り継いで、ナッパ服に着替える。『もとクリ』に出てくるハマトラのプチックのワゴン車に給油して、社長の黒塗りをワックス掛けして、夕方になると東京へ戻り、父親のような年齢の編集者から「田中先生」なんて言われるジキルとハイドな日々(爆笑)。研修終了後の五月末に退社することとなります。



大震災の際には五〇ccのバイクを駆り、ボランティア活動に奔走。

半年間、大阪でホテル住まいしながら、できることをできる限りやろうと。避難所が殺伐としていたので、連載していたコミック誌の編集部に「各避難所に置きたいから毎週五十冊ほど送って」と頼むと、「赤十字でもない田中みたいな一個人に渡して大丈夫か」と会社が難色を示す。ところが、「朝日新聞」社会面に

僕の活動が写真入りで掲載されると、「早く裏表書を回せ」と担当者はハッパを掛けられたらしい。これが僕が言うところの「精神的ブランド」。日本人は肩書きや権威のお墨付きに弱いんですね。

その後、不信任決議に伴う出直し知事選を挟んで二〇〇〇年からの六年間、長野県知事を務める。

財政再建団体転落寸前だった不透明な官僚政の象徴に思えた知事公舎には住みたくなくて、善光寺そばのマンションを自前で借りました。二〇〇三年、『いまクリ』の註にも出てくる伊那谷の秦阜村の住民となります。

村長の松島貞治さんは、暮らしていた原風景を眺めながら人生の終末を過ごさせてこそ福祉という信念の持ち主。厳しい財政でも独居者を支援する在宅訪問介護を実践していた。僕は感銘を受け、上田と松本育ちの自分は、実際に村に住んで集落の行事にも参加しないと、その実情が判らないと、松島邸の一部屋を間借りします。住民票を移し、週に二日は高速バスで三時間、

クリスタル族」で大阪出身だった祖母は、いやなことがあっても翌日にはケロッと忘れてしまうタイプでした。そうした前向きな陽気さを尼っ子にも感じますね。今でも思い出深い街です。

「33年前」には携帯電話など存在しませんでした。学生時代、待ち合わせのハチ公前に三十分経っても現れないデートの相手は、ばっくれたのか、途中で事故に遭ったのか、連絡する手段もなかった。今や人口より契約台数の方が多い。でも、夜中に着信したLINEを未読のまま子どもが登校するとクラスでいじめられる。果たして便利になったのか息苦しくなったのか。そして、世界に類を見ない超少子・超高齢社会に直面している。

『もとクリ』の登場人物も、いまや五十代。その彼女たちが「微力だけど無力じゃない」と自分に言い聞かせて歩いて行く今回の『いまクリ』にはヤスオも登場します。日本、そして読者のあなたも大きく変化したこの三十三年間を振り返る切っ掛けとして読んで頂けると嬉しいですね。(取材・構成 佐野之彦)